

「異なる記憶」を理解し、「共通の記憶」を

「いがみ合い」「対立」は克服できる。互いの「異なる記憶」を理解しあい、歴史にきちっと向き合うことで「共通の記憶」を作り、「多様な共通の未来」を作ることだ。

ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下についての記憶はどうだろうか。米国では、「原爆投下によって対日戦を早く終わらせ、多くの米兵の命を救った」という記憶が主流だ。原爆開発が行われた地域では、キノコ雲をモチーフとしたマークが地域のシンボルとして使われている。しかし「核兵器を二度と使わせてはならない」という原水爆禁止運動の拡がり、ヒバクシャの訴えが「核兵器は非人道的兵器」として国連での「核兵器禁止条約」につながった。「ヒロシマ、ナガサキの記憶」が「人類共通の記憶」として形成されつつあるのだ。もちろん核保有国による「核による脅し合いは激しくなっており予断は許されない。

私たち日本国民に問われていること

日本における「戦争の記憶」でスッと抜けている事がある。軍事的に完敗した米国との戦争は「太平洋戦争」として記憶されているが、アジア諸国との戦争、とりわけ中国での戦争や韓国・朝鮮での植民地支配の記憶が抜け落ちているのだ。

多くの日本国民が、中国大陸での戦争で、帝国陸軍(大日本帝国陸軍)が、何をしたのか知らない。大日本帝国がいかに過酷な植民地体験を朝鮮半島の人々に強いたかを知らない。

一方、これらの国々の人々は、肉親の命を奪われたり、財産を奪われたり、民族としての尊厳を否定された「痛み」を忘れていない。

他国に軍隊を送り、軍事力によってこれを制圧し、命や財産を奪うことを「侵略」「略奪」という。まずはこの歴史ときちっと向き合い、「不幸な時代」の「共通の記憶」を対話によって再構築することが必要だ。

敗戦後、国際復帰するに際し、先達たちは「平和国家日本」の建設を掲げ、近隣アジア諸国との信頼回復に務めた。製鉄業などは、日本の技術を伝え、中国

や韓国の経済成長への礎づくりに貢献した。「軍国日本」の記憶を過去のものとし、戦後 70 年掛かって「平和国家日本」の記憶はアジア諸国共通のものとなりつつあったのだ。

残念ながら、「戦争を知らない」政治家たちによる「歴史の改変・捏造」は、対立を煽ることで利益を得ようとする者たちに、絶好の口実を与え、国益を損ない続けている。戦後 70 年掛かって築いてきた「信頼」「平和国家」が壊されつつある。

女性の人権、尊厳にかかわる問題として

戦争は究極の暴力だ。腕力、武器によって敵を傷つけ命を奪う。そんな心理状況下、性的要求発露の道具として女性が対象化される。兵士達をなだめるために売春宿、慰安所が設けられていた。

「慰安所」は多くの国でも普通にあったのだ。日本においては、敗戦後、進駐軍のために「余暇・娯楽協会」の「特殊慰安施設」が設けられた。理由は「普通の女性が被害に合わないために」だった。

慰安婦として多くの兵士の相手をさせられた女性達の苦痛はいかほどだったのだろうか。とりわけ韓国の慰安婦達は、戦後長く続いた軍事政権下、自らの屈辱の体験を口にするすらできなかった。政治が民主化されやっとな被害者として訴えることができるようになったのだ。

「いかなる性暴力も許してはならない」「女性の尊厳を守れ」これが今世界で広がっている。女性への性暴力の記憶は、この文脈の中で共通の記憶として再構成される必要がある。

未だ沖縄では米兵による性暴力が跡を絶たない。日本の女性が被害に合い 続けているのだ。

最後にグラックさんの言葉を繰り返す。

「私たちに変える責任があるのは過去ではない。未来なのだ。」

「開かれた対話こそが、多様な過去と現在を繋げる道である。それは同時に、多様でありながらも共通の未来を想像するための道でもある」